

知床におけるヒグマ保護管理への貢献

知床森林生態系保全センター 一般職員 正月 公志

1. はじめに

知床は、世界で最もヒグマが高密度で生息していると言われ、ヒグマは知床を象徴する野生動物となっています。一方で、ヒグマによる農業等への被害や観光客がヒグマに不用意に近づくと人身事故につながりかねない危険な状況も発生しています。本発表では、ヒグマ個体群の保全とこのような住民等の軋轢解消を目的に環境省や林野庁等が共同策定した知床半島ヒグマ保護管理方針の下、当センターが行っている取り組みをご紹介します。

2. センターの主な取り組み

当センターは、ヒグマそのものを管理する組織でないことから、ヒグマの生息地保全と観光利用の適正化に特に貢献するため、モニタリング調査（ミズナラ堅果結実調査、サケ科魚類の遡上数調査等）やエゾシカ捕獲、河川工作物改良、利用者に対する普及啓発活動を行っています。

ミズナラ堅果結実調査は、H1年から始めていますが、26年では調査開始以来最大の豊作年でしたが、一転して27年では過去最低となり、冬眠を控えるヒグマにとって厳しい年となりました（図1）。

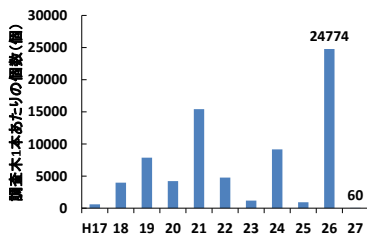


図1 過去10年間における堅果個数の推移

ルシャ川におけるカラフトマスの遡上数等調査では、H27年は25年と比べて遡上数は約0.07倍、産卵床数は約0.14倍と大きく減少しました（図2）。また、図2に示すとおり24年以降は、推定遡上数に対して産卵床数がそれぞれ約0.01倍、約0.03倍、約0.06倍となっていることから、知床のヒグマは、カラフトマスを相当量捕食していると考えられました。また、斜里町が集計した24、25、27年のヒグマ目撃件数がそれぞれ1763件、745件、1486件となっているなどマス遡上量が人の生活圏へ出没するヒグマの数に大きく影響することが明らかになっています。さらに、近年の研究において知床のヒグマは、マスの遡上（例年は8月中旬～）が遅れると栄養状態が極端に悪化することが分かっています。

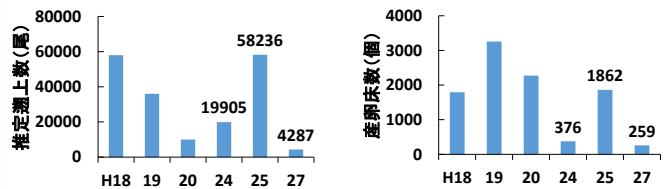


図2 ルシャ川におけるカラフトマスの推定遡上数及び産卵床数の推移

す。これは、増えすぎたエゾシカが夏場のヒグマにとって重要な高茎草本を食べ尽くしていることが要因となっているからです。

当センターでは、このような状況を改善することも視野に入れてエゾシカの捕獲をH25～26年の間で計154頭行いました。

ヒグマ観察を目的とした観光船の運航も行われている等、ヒグマが知床の重要な観光資源の一つになっているのも事実です。このため、普及啓発活動として、特にカメラマンが殺到したH25年には関係機関と連携してマナーの啓発や監視を集中的に行うとともに、登山者に対してヒグマの出没情報等の伝達やフードロッカーの使用等を促すなどしてきました。街頭でも餌やり禁止を促すチラシ等の配布も行ってきました。

3. 新たな課題と今後の展開

遺産指定後、5基の河川工作物の改良をしてきましたが、マスの遡上量を増やすためにもさらなる改良を進めることが重要と考えています。

研究者の調査から夏場の餌としてハイマツも重要であることが分かってきていますが、結実情報は全く不足している状態です。このため、当センターでは、一昨年から結実調査を試行し、今後は研究者と連携して行うこととしています。

また、ヒグマによる人身事故を防ぐため、登山道の入り口に設置してある入林者名簿については、記載事項の見直しを行い、下山者が登山道におけるヒグマの情報を書き込めるよう作成し直し、行政機関を通さずとも容易に最新の情報を次の登山者が得ることができる仕組みも充実させていきます。

このような課題を踏まえ、当センターでは、各関係機関や研究者と連携し、今年度から管理方針の見直しを開始しています。H29年度は、より新しい方針に従った施策を実施する予定です。